千葉県八千代市に於ける酪農業の展開

長谷川　博　子

第一章　八千代市の酪農業

八千代市に於ける酪農業の特色をまとめると次のようになる。

①，多頭飼養である。千葉県に於いても，乳牛頭数分布の高い市の一つであり，一戸当りの飼養頭数も多い。また，大規模経営の占める位置が大きい。

②，経営内容は，搾乳と生乳の販売のみを目的とした搾乳業者的性格が強く，それは飼料の自給率，乳牛の年令構成，乳牛の更新率，搾乳牛率にあらわれている。

③，生乳は飲用向けとして販売され，処理場でも，ほとんどが飲用牛乳になっているが，生産調整のため，一部，乳製品に加工されている。

④，乳牛飼養農家は，八千代市全域に分布しているのではなく，旧大和田町の下総台地上に多く分布している。

⑤，乳牛飼養農家に於て，酪農収入の占める位置は大きく，農業収入のトップを占める場合が増加している。

第二章　千葉北部酪農農業協同組合と牛乳の集団飲用

北部酪農協は，生乳生産者が処理場を持ち，集団飲用という新しい消費形態と結合して良質安価の牛乳を生産している点で注目される。現組合員数は１１０人であるが，１日当り７２石の処理能力を持つ工場は，組合員だけの集乳量では足りず，他県から生乳を買って稼動している。これはコストを高くし，組合の「天然牛乳の集団飲用」により，生産者には拡大再生産費を保証し，消費者には，良質安価の牛乳を供給するという目的実現のためのネックとなっている。また，最近は集団飲用が新しい販売方法として注目され，メーカーや，他の酪農協との競争が激化している。資金調達に於ても，問題をかかえている。

第三章　都市化と酪農業

①，酪農経営の過程で生ずる臭気とハエ，糞尿や敷ワラ等の処分方法は，宅地化に伴い，好ましくない居住環境を作り出すため，都市化の進展により，酪農業の続行が困難となる。八千代市の場

合，酪農中心地帯に都市化特に，宅地化が及んでいないため，現在の所こうした問題は焦眉のこととはなっていないが，いずれ近いうちに問題となってこよう。

②，地価の高騰は，経営規模の拡大，農地の交換分合を妨げ，農業経営の合理化を阻んでいる。一方，土地さえ持っていれば，という安心感が生じ，返って経営の科学的管理や経営方法の改善を妨げており，それは市の農業対策にもあらわれている。

③，騒音，振動，排気ガスの乳牛に与える影響については，調査がなされていず，また明白な形をとってあらわれてもいないが，何がしかの影響を与えていることは，まちがいない。

甲府盆地北東部の農業的土地利用について

原　賀　真理子

調査地域は甲府盆地の北東部で，西を笛吹川に，東と南を重川に，北を山地で区切られ，ほぼ三角形をしている。行政的には塩山市と山梨市にまたがる。地形と農業的土地利用との間にどのような相関関係があるか，もし関係があれば，その度合はどの程度であるかを量的にとらえることが，論文の目的である。

調査地域は笛吹川と重川の扇状地である。気候は年降水量が少なく，夏の気温は高く，年較差は大で，日照時間，日照率は大きな値を示し，内陸盆地的特色を示す。

土壌は，５つの土壌統に分けられるが，いずれの地域も，土壌的に生産阻害因子のないすぐれた農耕適地でもないが，一方耕地として利用が困難とされる土地もない。

農家は平均５０ａの狭い耕地面積で経営規模はさほど大きくはないが，専業農家が多く昭和４０年には約３８％を占めている。その収入の大半を果樹と養蚕から得ている。

農業土地利用の変遷をみると，明治中項では畑が多かったのが次第に桑園が増加し，昭和初期には桑園面積は耕地の大部分を占めるに至った。しかし，生糸の価格低下等が原因して桑園は次第に減少し，第二次大戦直後までに水田面積はかなりの増加をみたのである。戦後，果樹園化が進み，昭和２５年から４３年までの１８年間に，果樹園面積は約８倍となり，現在は，果樹園化への過渡期にあるといえる。

果樹園化がおこなわれる要因としては，戦後の生活水準の向上からくる需要の増大，大市場である東京に近いこと等に加えて，果樹は単位面積当りの生産額が米よりも高いこと，桑も果樹と同様に高い収益をあげ得るが労働報酬は果樹の方がより高いことがあげられる。

栽培されている果樹の種類はぶどうとももが主で，他にうめ，かきなどがあるが，最近はももが